

# 日本語の条件表現の習得研究

— L1幼児の縦断的発話データの分析から —

崔 延 朱

(2010年10月7日受理)

A Study of the Acquisition of Japanese Conditional Expressions  
— Based on the analysis of longitudinal L1 data of Japanese infant —

Younjoo Choi

**Abstract:** The present study aims at examining the validity of Akatsuka and Clancy (1993) and Solvang (2004a, b), who made contradictory claims about the development of conditional expressions in Japanese. Focusing on forms and meanings, the use and development of three conditional expressions (-tara, -to, -ba) found in four infants' longitudinal data are analyzed in two studies. The results showed the following common tendencies among the children: (1) conditional expressions initially appear as a specific form with a specific function, indicating a single form-function mapping. (2) The use of conditional expressions spreads from the demotic modality (D conditional) to other forms of conditionals, even though the data characteristics are different between the two studies. These results support Akatsuka and Clancy's claim (1993) but not Solvang (2004b), in that the Japanese infant's conditional expression starts from a specific meaning function and the linguistic form like D conditional acquisition, and usually extends to more diverse conditional forms and functions.

**Key words:** conditional expressions, longitudinal data, L1 data of infant, acquisition process

キーワード：条件表現, 縦断研究, L1幼児, 習得過程

## 1. はじめに

子供の言語発達において、条件文の習得は他の複文の出現と比べ、非常に遅いと言われている (Bowerman 1986, Reilly 1986)。しかし、これらは英語を対象としている研究で、日本語の条件表現「たら・と・ば・なら」を対象としている習得研究は多くない。

少ない研究の中、L1 幼児の日本語の条件表現の習

---

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：迫田久美子（主任指導教員）、白川博之  
畑左由紀子、深澤清治

得を分析した研究には Akatsuka and Clancy (1993), Solvang (2004a, b) がある。

しかし、Akatsuka and Clancy (1993) は、分析対象の幼児の発話数が少ないため（条件文の収集回数：25回、8回）、彼らの主張には検証の必要性がある。そして、Solvang (2004b) は、Akatsuka and Clancy (1993) の結果を検証することを目的として分析しているが、データの収集方法が Akatsuka and Clancy (1993) とは異なるため、Akatsuka and Clancy (1993) の検証の研究としては適していないという問題点が指摘される。

一方、Solvang (2004a) は、幼児1名だけに対する結果であるため、他の幼児にも同様の傾向が見られるかどうか検証する必要がある。

したがって、本研究では先述 Akatsuka and Clancy (1993) と Solvang (2004a, b) の論議を検証するため、先行研究で扱われたデータ収集法と類似の方法で収集されたデータ（それぞれ自然発話データ、日記形式のデータ）を用い、分析・考察を行う。具体的には L1 幼児 4 名を対象とする調査を行い、条件形式の出現が見られる初期の段階から、ある程度自由に話ができる年齢（4 歳）になるまでの 3 年間の縦断的発話データに見られる条件表現の使用にはどのような特徴があるのか、その形式と意味機能の側面から、L1 幼児の条件表現の習得過程を明らかにすることを目的とする。

## 2. L1 の条件表現の習得に関する先行研究

L1 幼児の条件表現「たら・と・ば」の習得を扱った研究には、大きく発話機能の側面と形態論的側面から分析したものに分けられる。以下には以上の観点から述べられている先行研究の概要と問題点、そしてそこから考えられる課題について詳しく述べることにする。

### 2-1. 発話機能の観点に着目した研究

以下では L1 幼児の条件表現の習得研究をまとめ、問題点を指摘すると同時に本研究における方向性と意義を示すことにする。

Akatsuka and Clancy (1993) は、2 歳前後の日本人幼児 2 名<sup>1)</sup>、韓国人幼児 3 名の親との会話をうい、幼児の言語発達が Deontic Modality から普通条件文へと発達することを説明している。Deontic Modality とは命令、禁止、許可などのように、話し手が相手の行動を規制するモダリティのことで Deontic Modality と一般に呼んでいる（赤塚・坪本 1998）。そして、そのような意味を持つ条件文のことを D 条件文とし、D 条件文と普通条件文（D 条件文以外の条件文のことを意味している）の使用傾向を分析した結果、日韓幼児の条件文の習得は英語圏の幼児より早く、普通条件文より D 条件文の方の習得が早いことを報告している。

Akatsuka and Clancy (1993) では、日本人幼児の条件文は D 条件文を土台にして普通条件文へと習得されることを述べている。しかし、発話数が非常に少ないため（条件文の収集回数：25 回、8 回）、D 条件文から普通条件文へと習得が広がっていくというプロセスの主張には検証の必要があると思われる。

Solvang (2004b) は、日本人幼児 1 名<sup>2)</sup> を対象とし、条件表現の発話機能という観点から幼児の 1 年 6 ヶ月間の条件表現の習得過程を分析している。その結果、D 条件文が普通条件文より先行するという Akatsuka and Clancy (1993) の結果に対し、D 条件文と普通条

件文の出現時期を比べた結果、D 条件文と普通条件文はほぼ同時に出現しているという結論を出している。

しかし、Solvang (2004b) の研究は日記的な追跡方法によるものであるため、Akatsuka and Clancy (1993) のデータとは均質性に欠けており、その点が結果に影響を及ぼした可能性も否定できないと思われる。

以上のように、L1 幼児の条件表現の習得研究はまだその数も少なく、先行研究では D 条件文と普通条件文の順序について議論がなされていることなど、一致した結果が得られていない。

したがって、本研究では自然発話データによる調査 1 と日記形式のデータによる調査 2 という性質の異なるデータを用いて L1 幼児の条件表現の習得過程を分析することで、先行研究の結果を検証する。

### 2-2. 形態論的側面に着目した研究

L1 幼児の条件表現に関する先行研究では、Akatsuka and Clancy (1993) と Solvang (2004b) において L1 幼児の条件文の持つ発話機能に関して述べられていた。

一方で Solvang (2004a) では、L1 幼児の自然な会話の中に条件接続詞がどのように現れているのか、出現頻度、順序などといった形態論的側面からの検討を行っている点で注目できる。

その結果として、L1 幼児の条件接続詞の習得順序は「タラ」→「ト」→「バ」<sup>3)</sup> であること、「タラ」は動詞と接続する頻度が高く、「ト」と接続する品詞の種類は動詞の肯定形と否定形の接続が半々であること、「バ」は出現数は少ないが、動詞と接続する傾向があることなどが報告されている。

これらは新しい観点からの分析ではあるが、幼児 1 名に対するものであるため、他の幼児にも同様の傾向が見られるかどうかは明確でない。また、形式ごとに接続される品詞の分類が行われてはいるが、それに関する詳しい考察が行われていない点でまだ検討の余地があると思われる。また、このような形態論的側面からの研究が発話機能の観点からの先行研究とどのように関わっているのかについても考察する必要があると思われる。

したがって、本研究では以上の先行研究からの問題点や課題を踏まえ、L1 幼児の縦断的会話データにおける L1 の条件表現の習得過程に「形式」と「意味機能」という 2 つの要素がどのように関連しているのか、その傾向と特徴についても考察する。

## 3. 分析

### 3-1. 分析の目的

L1 幼児（調査 1、調査 2）のデータ分析の目的を以下に示す。

- ① L1 幼児(調査1, 調査2)のデータから, 条件表現「たら・と・ば」<sup>4)</sup>の習得プロセスを分析する。
- ② Akatsuka and Clancy (1993) と Solvang (2004a, b) の研究の検証を行う。

### 3-2. 分析データ

#### 3-2-1. 調査1(幼児3名)のデータ

以下のデータは Akatsuka and Clancy (1993) とデータ収集方法が同一なデータ(親との自然会話)である CHILDES (Child Language Data Exchange System)<sup>5)</sup> の3名(幼児 H, I, M)の幼児を対象とし, 分析したものである。

幼児 H, I, M を対象とした調査1のデータは, 幼児の家で親, もしくは兄弟と遊びながらとった自然発話データである。

データは平均1週間に1回, 15分から1時間程度のデータを1年~3年の長期間に渡り録音し, それを文字化したものである(表1参照)。

表1. CHILDES (Child Language Data Exchange System) の日本人幼児3人の概要

対象幼児	年齢	録音期間	録音頻度
Hamasaki (以下 H)	2;2-3;4	16ヶ月	2・3回/月
Ishii (以下 I)	0;6-3;8	36ヶ月	4回/月
Miyata (以下 M)	1;5-3;0	19ヶ月	4回/月
対象幼児	データ収集回数	平均データ収集時間	総発話数
Hamasaki (以下 H)	32回	10~30分	18189
Ishii (以下 I)	100回	15分	48291
Miyata (以下 M)	56回	1時間	21097

#### 3-2-2. 調査2(幼児1名)のデータ

以下のデータは, 調査1とはデータ収集方法(日記形式)が異なる CHILDES の幼児1名(幼児N)を対象とし, 分析したものである。

幼児Nを対象とした調査2のデータは Solvang (2004a, b) と同様, 日記形式のものである。以下のデータは0歳から7歳までのデータであるが, 本研究では調査1の幼児と比較するために, 0歳から4歳までのデータを対象とした。

幼児Nのデータは親が子供と会話したときの発話・状況などをNの親が詳しく記述した日記形式として記録したものである。よって, 調査1のデータと直接比較することは難しいが, 同様の傾向が観察されているのかを中心に分析することにする。

表2. CHILDES (Child Language Data Exchange System) の日本人幼児1人の概要

対象幼児	年齢	記録期間	記録頻度
Noji (以下 N)	0;1-4	48ヶ月	不定期
対象幼児	データ収集回数	平均データ収集時間	総発話数
Noji (以下 N)	98回		31007

### 3-3. 分析方法

Akatsuka and Clancy (1993) と Solvang (2004a, b) の検証を行うため, Akatsuka and Clancy (1993) と同様な方法で収集されたデータを調査1, Solvang (2004a, b) と収集方法が同じであるデータを調査2とし, 分析する。これからの分析では調査1と調査2に分け, 以下のような方法で分析を進めていく。

- ① 調査1のデータから「たら・と・ば」が使われている部分を抽出する。
- ② 抽出された部分から「たら・と・ば」が使われていた部分を中心に, 前件と後件に分け, その使用傾向をまとめる。意味的に不自然な文でも条件表現が使用されている文全体を対象とし, 分析を行う<sup>6)</sup>。
- ③ 使用傾向を整理するため, 各幼児から観察された条件形式を時期別にまとめ, その出現頻度と出現推移を調べる。
- ④ 各幼児から観察された条件文の意味機能(D条件文・普通条件文)を時期別にまとめ, その出現頻度と出現推移を調べる。
- ⑤ 以上と同様な方法で調査2のデータを分析する。

### 3-4. 意味機能の分類基準

条件文を以下のように分類して調査する。

**D条件文**：D条件文は命令・禁止・許可など話し手が相手の行動を規制するモダリティを表す条件文のことをD条件文とする(赤塚・坪本 1998による分類)。

**普通条件文**：D条件文以外の条件文を指し, 本研究では文の意味機能によって以下の5つに分類する。

- ① 「時間関係を表す条件文」<sup>7)</sup>(「赤ちゃん, ねんねしたら, おんぶしてね」)
- ② 「ある状況を想定し, 話をする場合の条件文」(「やっつけたら, どう?」)
- ③ 「事実として既に起こっていたことを述べる時の条件文」(「お母ちゃん, オムツ除けたら, しっこしちゃったよ」)
- ④ 「事実と反する事柄に対する話者の気持ちを表す条件文(のけば, いいのに)」
- ⑤ 「一般的な常識を話している場合の条件文」(「電車来たら, あぶないよ」)

## 4. 分析の結果

### 4-1. 条件形式の全体の出現傾向

#### 4-1-1. 調査1の条件形式の全体の出現傾向

本研究で扱っている調査1の幼児データは、幼児とその親、もしくは兄弟との自然発話を収録したもので、発話場面は子供が遊んでいる時の話が殆どである。発話された条件形式の総数と出現時期は表3の通りである。

各幼児の条件形式の出現頻度を見ると、3人に共通して「たら」の出現が最も多い。一方で、「ば」と「と」の場合は全く使われていない形式もあれば、使用は見られるが「たら」の使用に比べると、非常に少ない場合もあり、条件形式の使用は幼児それぞれで異なっていることが分かる。

また、出現順序も「たら」が一番早い幼児もあれば、「たら」より「と」が早い幼児もあり、幼児ごとに異なっていた。

表3. 調査1の幼児の条件形式の出現時期と総出現数

	たら		ば		と	
	出現時期	総出現数	出現時期	総出現数	出現時期	総出現数
H	3:3	7	3:0	4	・	・
I	2:5	367	3:7	4	2:10	5
M	2:11	37	・	・	2:8	30

#### 4-1-2. 調査2の条件形式の全体の出現傾向

幼児Nの条件形式の使用は「たら」「と」「ば」という順で出現していた。その中で一番出現が多かったのは「たら」で、他の形式より出現が極めて多く見られた。このような幼児Nの出現順序は、調査1の幼児Iとは共通しているが、調査1の他の幼児とは異なっていた。

表4. 調査2の幼児の条件形式の出現時期と総出現数

	たら		ば		と	
	出現時期	総出現数	出現時期	総出現数	出現時期	総出現数
N	2:1	749	2:8	9	2:4	56

### 4-2. L1幼児の「たら」の出現傾向

#### 4-2-1. 調査1の幼児の「たら」の出現傾向

##### 4-2-1-1. 形式による分析

L1幼児3人(H, I, M)のデータからはいくつかの共通する傾向が見られたが、幼児Hの「たら」の出現はわずか7例のみで、特徴的な使用傾向は見られな

かった。

L1幼児M, Iの2人の「たら」の出現傾向をまとめると、まず、初期には条件形式が脱落している形としての出現が目立っていた。このように上記の2人の幼児の使用例を見ると、「たら」の代わりに「て」「た」形で出現したものが多く(例1)。

##### 例1) L1 幼児の初期の条件形式の出現

[父親とブロック遊びの時、父親に]  
**[幼児 M 2;9]** 来た、だめ [=来たたら、だめ]  
 [父親と遊んでいる途中]  
**[幼児 I 2;5]** 叩いた、だめ [=叩いたら、だめ]

また、条件形式の出現がなかった時期の「たら」の後件は「あかん・だめ・いかん」などが顕著に見られ、幼児M, Iの「たら」の使用は「あかん・だめ・いかん」などの形式から始まっていた。そして、この結果はAkatsuka and Clancy (1993)の結果と一致している。

#### 4-2-1-2. 意味機能による分析

L1幼児3人の「たら」が使用された文の意味機能による分析からは、以下の点が述べられる。

幼児の「たら」の初出は「何かを禁止している時」によく用いられ、初期は後件に「だめ、いかん、あかん」などの形式が使用されているため、「禁止」の意味機能(D条件文)としての出現が多かった(例2)。しかし、そのような初期の意味機能の使用はその後、「禁止」の使用(D条件文)に限らず、普通条件文を表す様々な使用(仮定・一般・既定など)も見られるようになった(例3)。

##### 例2) 幼児M, Iから観察された「禁止」を表す意味機能の使用例

**[幼児 M2;11]**  
 [ブロック遊びをしながら]  
 [ここに] 来たたら、だめ  
**[幼児 M 2;11]**  
 [ブロック遊びをしながら]  
 [そこから] 出てきたたら、だめ  
**[幼児 M2;11]**  
 [自分のブロックに父親が触ろうとすると]  
 触って、いかなだよ  
**[幼児 I 2;6]**  
 [外に出ようとする弟に向けて]  
 行ったら、あかん  
**[幼児 I 2;6]**  
 [何か食べようとしている弟に向けて]  
 食べたたら、あかん

例3) 幼児I, M から観察された「禁止」以外の意味機能の使用例

**【幼児I 2;8】**  
「やっつけたら、どう?」:  
ある場合を想定し、仮定の話をしている条件文

**【幼児I 2;11】**  
「電車が来たら、あぶないよ」:  
一般的な常識を話している条件文

**【幼児M 2;11】**  
「どうしたら、いいの?」:  
ある場合を想定し、仮定の話をしている条件文  
「こっちがコナーってやってたら、こっちは強いよ(強かった)」:事実として既に起こっていたことを述べている条件文

4-2-2. 調査2の幼児の「たら」の出現傾向

4-2-2-1. 形式による分析

幼児Nの「たら」の出現傾向からも、調査1の3人と同じく、初期には条件形式が脱落した形としての使用が観察された。また、初期の条件形式の後件の全使用は「あかん・だめ・いかん」などの形式で、後件の形式は「いかん」という形式から使用が見られた(例4)。

以上の結果は調査1の結果、Akatsuka and Clancy (1993)の結果と一致している。

例4) L1幼児Nの初期の条件形式の出現

( ): 幼児Nの親のメモによる解釈

(午後5時ごろ、ヒライの祖母のお家、親戚のヨシコちゃんがそばに来ると、このように言って、怒る)

**【幼児N 2;0】** 来て、いかん [=来たなら、だめ]

4-2-2-2. 意味機能による分析

L1幼児Nの「たら」が用いられた文の意味機能による分析では、調査1の結果と同様、初出は「何かを禁止している時」によく現れ、「禁止」の意味機能の出現が多く見られた(例4参照)。

しかし、調査2の幼児Nの場合、調査1の3人の幼児とは異なり、集中的に「禁止」の意味機能としての使用段階を経て、「時間関係を表わす条件文」の集中的な使用段階が見られた。これらの意味機能は2;2から出現し始め、2;2の19回の出現中、18回が「時間関係を表わす条件文」であった(例5)。

以上の結果から考えると、「禁止」を表すD条件文の使用が初期に出現していること、D条件文の使用から普通条件文の使用へと移行していることは調査1の

分析と共通した結果と言える。

Solvang (2004b)では以下のような「時間的な因果関係」を表す条件文を「計画」とし、この発話機能は初期に出現していると述べている。以上のような結果から考えると、「時間関係を表わす条件文」の使用が早い段階から見られていたことはsolvang (2004b)とも一致しているが、これらの結果がデータに調査1と調査2というデータの性質による影響であるかどうかは現段階では分からない。

例5) 時間関係を表わす意味機能の使用例

( ): 幼児Nの親のメモによる解釈

**【幼児Nの2;2】**  
(午後9時過ぎ、近くの遊園地のシーソーに乗っているとき、すぐそばにあるブランコに乗りたくなって、母に乗ろうと言ったが、他の子供が乗っていることを母が言うと、以下のように言う)  
空いたら、乗ろうね  
(午後5時半頃、昼寝から目覚めて、あかちゃん弟テルキが寝たら、おんぶしてくれと、母に言う)  
赤ちゃん、ねんねしたら、おんぶしてね  
(12時10分過ぎ、昼食のとき、このように言う)  
ご飯、食べたら、遊ぼうね

例6) 幼児Nから観察された「禁止」以外の意味機能の使用例 ( ): 幼児Nの親のメモによる解釈

**【幼児N 2;4】**  
(午前9時24分、パンを食べながら、以下のように母に聞く)  
砂糖付けたら、おいしい?:  
ある状況を想定し、話をしている条件文  
(午前9時30分頃、頭におできがたくさんできて、痛いといって泣くので、母が病院に行こうという時、Nは病院に行くのはいやだといひ、以下のように言う)  
お薬付けたら、おできが治るね:  
一般的な常識を話している条件文  
(午前10時半、父が弟テルキのオムツをのけると、赤ちゃんがしっこをしたので、そんなことを母にこのように言う)  
母ちゃんオムツを除けたらね、しっこしちゃったよ:  
事実として既に起こっていたことを述べている条件文

### 4-3. L1幼児の「ば」の出現傾向

#### 4-3-1. 調査1の幼児の「ば」の出現傾向

##### 4-3-1-1. 形式による分析

幼児Mの「ば」の出現は見られなかったが、幼児Hと幼児Iでは3:7, 3:0から「ば」の出現が見られた。「ば」の出現は「たら」に比べ遅く、その形式は「□ば+いい」だけが出現していた。しかし、出現数が少なく、「□ば+いい」以後の追跡はできなかった(例7, 8)。

以上の分析をまとめると、L1幼児HとIの「ば」の出現は「たら」より遅いこと、「ば」の出現は殆ど「□ば+いい」から始まる事が分かる。

##### 例7) 幼児IのH「ば」の全使用例

**【幼児H 3:7】**

〔母親と手芸の話をしてしながら〕

〔新しく〕作れば、いい

〔母親が何かを縫っていることを見て〕

通れば、いいんだよ (2回)

〔強い口調で〕通れば、いいの!

##### 例8) 幼児Iの「ば」の全使用例

**【幼児I 3:0】**

〔ブロック遊びをしながら、どうしたら自分が思うような形になるのかを考えながら、父親に向けて〕

こうすれば、いいや (3回)

〔父親に自分が考えた遊び方法を教えている場面〕

こうすれば、高くなんね

〔父親に向けて、自分が考えた遊び方法を教えている場面〕

こうすればや

##### 4-3-1-2. 意味機能による分析

意味機能の面からみると、幼児Hの「ば」の使用は、母親と手芸の話をしている時に「ある状況を想定し、話をする場合の条件文」として、母親に助言をしている場面での使用が多かった(例7)。

幼児Iも父親とブロック遊びをしながら、「ある状況を想定し、話をしている条件文」で、何かを相手に助言している場面での使用が多かった(例8)。

しかし、以上のような形式、意味機能の使用が「ば」の特徴になるのかどうかは、出現数が少ないため本研究では詳しく述べることはできないが、これから検証する必要があると思われる。

#### 4-3-2. 調査2の幼児の「ば」の出現傾向

##### 4-3-2-1. 形式による分析

幼児Nの「ば」の初出は2:8で「たら・と」に比べ

遅く、初期の一回の使用を除くと、全ての後件の形式は「いい」であった。幼児Nの使用を詳しく見ると、「いいのに」の出現が非常に多かったが、その後の使用には「いいの」「いいでしょう」も見られるようになった(表5)。

幼児Nの場合、調査1のデータの他の幼児に比べ、最初の段階から「ば」の後件に「いい」が接続した形式として出現しているという特徴がある。

表5. 幼児Nの「ば」の使用傾向

年	前件	後件
2:8	お母さんが取れば	いい(のに)
2:9	ここへ持ってくれば	おねんねができないでしょう
3:2	ここにお水持って行けば	いいのにね
3:4	お母さんがくれば	いいのに
3:5	捨てば(捨てれば)	いいのにね
	これでこうして輪を磨けば	いいが(のに)
3:9	僕とここにずっとおれば	いいのに
3:10	バスがこなんかかったら、歩いて帰れば	いいのにね
3:11	持ってくれば	いい
4:0	お母ちゃんにちょうだい言えば	いいのよね
	お母ちゃん一人で行ってくれば	いいでしょう
4:5	持ってくれば	いいじゃない
	のけば	いいのに
4:6	自分の手をお口に持って行けば	いいのだから
	のけば	いいのに
4:10	お母ちゃんがモンタのお姉ちゃんに合った時が来たときに頼めば	ええのに

##### 4-3-2-2. 意味機能による分析

幼児Nの「ば」の出現は、最初から後件に「いいのに」が接続した形で現れたため、「事実に反する事柄に対する話者の気持ちを表している条件文」の使用が多かった。その後の使用は3:11の「持ってくれば、いい」(午前10時頃、遅い朝食のとき、食卓を揺さぶるので、母親が弟のコーヒーがこぼれると言ったら、このように言った)、4:5の「お母ちゃん一人で行ってくれば、いいでしょう」(午後8時すぎ、母が妹を連れて、お風呂に行こうとしていると、以上のように言う)などの「ある状況を想定し、話している条件文」の使用も見られた。

以上のような使用傾向は、「ば」の後件に殆ど「いいのに」が後続した形式が来たため、意味機能も集中したと思われる。

#### 4-4. L1幼児の「と」の出現傾向

##### 4-4-1. 調査1の幼児「と」の出現傾向

###### 4-4-1-1. 形式による分析

幼児Hの「と」の出現はなかったが、幼児I、Mから見られた「と」の使用における共通する傾向は、「と」と接続する形式の殆どが「否定形」である点である。幼児2人の「と」と接続する文法項目をみると、「否定形」の方が「肯定形」より多く出現していることが分かる(図1)。そして、「と」以外の条件形式(「たら・ば」と「否定形」との出現傾向を見ると、幼児Mにおいては「たら・ば」と「否定形」の出現が全く見られず、幼児Iにおいてもわずか2回だけであった。

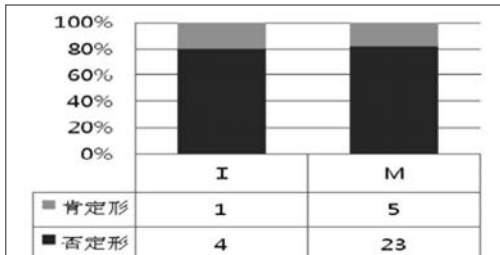


図1. 調査1の幼児2名の「と」の使用傾向

###### 4-4-4-2. 意味機能による分析

幼児Mの場合、「と」が使用された文の全体の使用は、後件がない形(「探さない」と)、後件がある文の場合は、「だめ・いかん」の形式(31/35回)の出現が多かった。このように、後件が省略された形、「だめ・いかん」といった形として出現した形いずれにも「命令・禁止」を表す条件文の使用が多く見られたことが分かる。

幼児Mの場合、「だめ」の使用は「たら」においても後続していたが、「□たら+だめ」の場合、「肯定形+たら」の使用だけが見られていたことから、幼児Mは「否定形+と」「肯定形+たら」のようなルールを形成している可能性が考えられる。

しかし、幼児Iの「と」の使用はわずか5例で、特定の意味機能の集中的な使用は観察されなかった。

##### 4-4-2. 調査2の幼児「と」の出現傾向

###### 4-4-2-1. 形式による分析

幼児Nの「と」の使用を分析すると、調査1の幼児2名とは発話数が異なるため、直接出現数を比較することはできないが、全体的に同様の傾向が見られた。

幼児Nの使用の殆どは「否定形+と」であり、他

の条件形式「たら・ば+否定形」の出現と比較してみると、幼児Nからも「否定形+たら・ば」の出現は全く観察されず、調査1の幼児2名と一致した傾向が見られた。

そして、Solvang (2004a)の調査においても「否定形+と」の出現は46.5%(20回)と、「と」の使用の半数という高い割合で現れていたと述べられており、本研究と一致した結果が見られた。

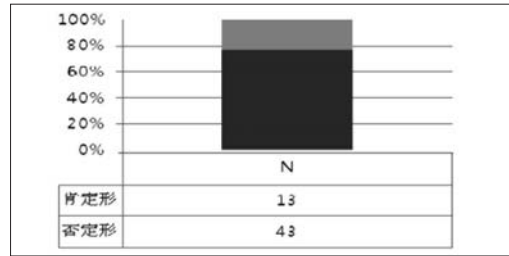


図2. 調査2の幼児Nの「と」の出現傾向

###### 4-4-2-2. 意味機能による分析

幼児Nの「と」の使用は2;4からで、出現時期が早く、出現は多かったものの、特定の意味機能の集中的な使用は見られなかった。

## 5. 考察

以上のように調査1と調査2から得られた結果は、「L1幼児の条件文の習得は「禁止」などを表すD条件文から習得される」という Akatsuka and Clancy (1993)の研究を支持する結果となった。

具体的には、幼児の条件文の習得には形式と意味機能の両方が幼児ごと、条件表現の形式ごとに異なり、それがL1幼児の条件表現の習得に関係していること、先行研究で論議されていた「D条件文→普通条件文」という使用傾向を見ることができた。そして、データの性質に関係なく、Akatsuka and Clancy (1993)と同様の結果が観察されたことから、Akatsuka and Clancy (1993)の主張を支持することができた。

本研究の調査1と調査2で得られた結果をまとめると以下のように示すことができる。

#### 【調査1の幼児から見られる傾向】

##### ①形式による分析

「たら」: 初期、「□〇(「たら」が脱落している形)+だめ・あかん・いかん」の出現が多く、後件はほぼ決まった形である。

「ば」: 「□ば+いい」の出現が多い。

「と」: 「□否定形ない+と」の出現が多い。

## ②意味機能による分析

「たら」：初出は「禁止」の意味機能である。

「ば」：「ある状況を想定し、話をする場合の条件文」で、相手に助言をしている場面での使用が多い。

「と」が使用された文の意味機能：

幼児 M：「命令」

幼児 I：特定の場面・意味での使用は見られない。

## 【調査2の幼児から見たれる傾向】

### ①形式による分析

「たら」：調査1の3名と同じく、初期、「□〇+だめ・あかん・いかん」の出現が多く、条件形式の後件は「あかん・だめ・いかん」ほぼ決まった形式としての出現が多い。

「ば」：「□ば+いいのに」の出現が多い。

「と」：「□否定形ない+と」の出現が多い。

### ②意味機能による分析

「たら」：調査1と同様、「禁止」の意味機能の出現が多い。「禁止」の集中的な使用段階以降、「時間関係を表わす条件文」の集中的な使用段階が見られる。

「ば」：「事実として既に起こっていたことを述べる時の条件文（いいのに）→「ある状況を想定し、話をする場合の条件文」で、相手に助言をしている場面での使用（いい）の流れが見られる。

「と」：特定の意味機能の集中的な使用は観察されない。

以上のように、調査1と調査2のデータはその性質が異なるが、両方の幼児の条件表現の習得過程からは以下のような共通する傾向が見られる。

- ・ある特定の形式に集中して使用する。使用形式は条件形式ごとに異なるが、どの条件形式からも初期はほぼ決まった形式として出現する。
- ・特定の形式の使用により初期の条件文の意味機能も特定の意味機能に集中する。
- ・両方のデータの性質が異なるにも関わらず、どちらのデータからも「禁止」などを表すD条件文の使用から条件表現の使用が広がっていく。

条件表現に見られる特定の表現は必ずしも同一なものではなく、幼児ごとに、また、形式ごとに異なることが分かる。条件表現には「たら・と・ば」という3つの形式があり、習得に複雑さが生じ得ることを考えると、L1幼児が初期に「たら・と・ば」をそれぞれ決まった形から使用し始めていることは、条件表現の使用を単純化しようとするL1幼児なりのストラテジーではないだろうか。そして、Hakuta (1974)、Wong-Fillmore (1979) では、幼児の英語の習得から

文のある部分を機械的に覚えるストラテジーを使用しながら習得していくことを指摘していることから本稿の結果が支持できる。

つまり、特定の意味機能を表すために、ある特定の形式を使用することによって、条件表現を習得し始め、また違う意味機能を表すために、また初期とは違う形式（もしくは拡大させた形式）を使用することで、多様な条件形式による条件文が使用できるという習得過程を辿っていくのである。

一方で、このようなL1幼児の条件文の習得に影響を及ぼす要因として、Akatsuka and Clancy (1993) では、L1幼児は毎日繰り返し大人からインプットを受ける上に、インプットを受けている文は幼児にも分かりやすい Desirability の原理<sup>8)</sup> から成り立っている点を挙げ、親の発話も幼児の発話と同様な方法で分析している。そして、幼児の以上のような結果は幼児が影響を受けている大人の文がD条件文であることから、その影響によって、以上の結果になったと考察している。

このような説明は、本研究でも確認できる。例えば、幼児Iの親の条件表現は幼児Iの使用傾向と非常に似ている（幼児Iの親の「たら」の全使用105回中、「□たら。だめ」の使用は102回であった）。本研究はL1幼児の条件文の習得に影響を及ぼす要因の追及を目的としていないため、詳しい分析・考察までには至っていないが、今後は以上のような幼児の条件表現の使用傾向に親の発話がどのような形で関係しているのかについても分析が必要であろうと思われる。そして、親からの影響を含め、幼児の言語習得に影響している諸要因についても明らかにしなければならないと思われる。

## 6. おわりに

本研究では、新たなデータを用いて、条件形式「たら・と・ば」の習得プロセスを形式・意味機能という2つの観点から分析を行うことで、L1幼児における条件表現の習得過程を試みるとともに、先行研究のAkatsuka and Clancy (1993) と Solvang (2004a, b) の論議を検証することを目的とした。分析・考察の結果、形式・意味機能の観点からは、日本語を母語とする幼児の条件表現は、D条件文のような特定の意味機能と言語形式から習得が始まり、普通条件文へと広がっていくという点が明らかとなった。先行研究のAkatsuka and Clancy (1993) と Solvang (2004a, b) の議論については、本研究はAkatsuka and Clancy (1993) を支持する結果となった。

本研究では先述 Akatsuka and Clancy (1993) と



Solvang (2004a, b)の論議を検証するため、先行研究で扱われたデータ収集法と類似の方法で収集されたデータ（それぞれ自然発話データ、日記形式のデータ）を用い、分析・考察を行った。

従来の研究では、ある1つの観点だけで分析を進める傾向がある。しかし、そのような分析では習得過程においての重要な部分が考察できなくなる可能性がある。習得研究に対する姿勢として、1つの観点からの分析ではなく、様々な観点からの分析を試みる必要があるという点からも本研究の意義があると考えられる。

しかし、以上のような発話データを扱うことによる限界も考えられる。発話場面・状況による文法形式への影響は排除できない。したがって、以上のような研究方法で分析された結果を一般化することは非常に難しく、他の研究方法を重ねていくことで明らかにしなければならない。

そして、今回の分析では、幼児の発話だけの焦点をおいたため、何故、このような結論が現れたのかに關する要因の追究までは至らなかった。

今後は、幼児の言語使用環境の1つである親の発話データを用い、そこから幼児の条件表現の習得を分析するという方法を探ることで、研究を進めていきたい。また、以上のような結果がL1特有のものなのか、それとも普遍的なものなのかをL2学習者の習得と比較することで明らかにしていきたい。

## 【注】

- 1) 日本の幼児の観察期間は、Y(男)は6ヶ月(1:11~2:4)、M(女)は3ヶ月(2:1~2:3)である。家庭訪問期間の回数はYは12回、Mは3回で、条件文の収集回数は各25回と8回である。
- 2) Solvang (2004b)の日本人幼児1名は研究者の娘で日記的な追跡方法によって調査され、条件接続詞を含む408用例が見られていた。
- 3) 本研究では、「と・ば・たら」を平仮名表記で用いているが、ここではSolvang (2004a, b)に従い、カタカナ表記とする。
- 4) 日本語の条件文を表わす形式には「たら・と・ば・なら」4つの形式がある。今回の分析において対象としている条件表現の形式は「たら・と・ば」であり、「なら」は出現が観察されなかったことから、分析の対象から除くことにした。
- 5) コンピュータを利用した国際的な言語データ共有システム CHILDES (Child Language Data Exchange System) プロジェクトによって作られたものである。現在では22カ国語のデータが含まれ、言語発

達研究者のみならず社会言語学、失語症、言語障害、外国語学習などのさまざまな研究者の間にも広く利用されている。

- 6) 今回の分析は誤用と正用を判断することではなく、条件形式が出現していた全ての文を分析の対象とし、そこから特徴的な傾向が見られるのかといった観点からの分析であるため、条件形式が用いられていた文を全て対象とした。
- 7) 「時間関係を表わす意味機能」は、「お母さん、(弟が)ねんねしたら、おんぶしてね」「(弟に向かって)大きくなったら、遊ぼうね」など1つの行動が終わったら、次の行動をするようにお願いする場合、近未来のことをいう場合など、必ずその時期が訪れ、実現を願う場面のことである。
- 8) Desirability 原理とは、文が表わしている発話行為を「望ましいか・望ましくないか」といった原理で判断するもので、D条件文の場合、大人が幼児の行為をDESIRABLEと見るか、UNDESIRABLEと見るかが後件にはっきり現れている(「菌みがかなきゃ、だめよ」,「Itayli-myen an-tway (たたいちゃ、だめ)」)という点から、幼児には習得しやすい原理であると説明している(赤塚・坪本 1998)。

## 【参考文献】

- 赤塚紀子・坪本篤朗(1998).『モダリティと発話行為』研究社出版、68-97.
- 稲葉みどり(1991).「日本語条件文の意味領域と中間言語構造—英語話者の第二言語習得過程を中心に—」『日本語教育』75、87-99.
- スニーラット・ニャンジャロンスック(1999).「タイ語話者による条件節「と・ば・たら・なら」の習得」『言語文化と日本語教育』18、25-35.
- スニーラット・ニャンジャロンスック(2001).「OPIデータにおける「条件表現」の習得研究」『日本語教育』111、26-35.
- 奈良夕里枝(2003).「と・ば・たら・ならの習得に関する一考察—韓国人の大学生を対象として—」『日語日文学研究』51、375-389.
- 堀恵子(2003).「韓国語母語話者を対象とする日本語条件文の習得研究」『言語と文明』1、53-82.
- 堀恵子(2005).『日本語条件表現の習得における普遍的側面と母語の影響:コーパスからの用法分類に基づいて』麗澤大学大学院言語教育研究科博士学位論文.
- Akatsuka, N. & Clancy, P. (1993). Effect and conditionals: Evidence from Japanese and Korean

- acquisition. In *Japanese/Korean Linguistic. 2*, 176-192. Palo Alto: CSLI.
- Bowerman, M. (1986). First steps in acquiring conditionals. In E. Traugott et al.(eds.) *On conditionals*, pp.285-307. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hamasaki, N. (2004). *Japanese: Hamasaki Corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank. 1-59642-053-7
- Ishii, T. (2004). *Japanese: Ishii Corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank. 1-59642-054-5.
- Lightbown, P. M. & Spanda, N. (1999). How languages are learned. Oxford University Press.
- MacWhinney, B. (2000). *The CHILDES Project: Tools for analyzing talk*. 3<sup>rd</sup> ed. Vol 2. *The Database*. Mahwah, N. J.: LEA
- Miyata, S. (2004). *Japanese: Aki Corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank. 1-59642-055-3.
- Noji, J., N. & Miyata, S. (2004). *Japanese: Noji Corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank. 1-59642-058-8.
- Reilly, S. J. (1986). The acquisition of temporal and conditionals. In E. Traugott et al. (eds.) *On conditionals*, pp.309-331. Cambridge: Cambridge University Press.
- Solvang, H. (2004a). 「幼児の日本語獲得過程に見られる条件表現の特徴－発話機能を中心に－」『大阪樟蔭女子日本語研究センター報告』12, 1-15.
- Solvang, H. (2004b). 「日本語を母語とする幼児の条件接続詞獲得過程について」『二ダバ』33, 21-30.